

助詞「ハ」と文構造が担う主題的意味のタイプ¹

坂本瑞生（東北大学大学院生）²

1. 主題の多層的把握

日本語の主題の研究は助詞「ハ」をめぐる問題を中心として進められてきた。特に、「ハ」を伴う有題文(=(1a))と、「ハ」を伴わない無題文(=(1b))の間の対比が注目される。

- (1) a. 花子は言語学を専攻した [有題文]
- b. 花子が言語学を専攻した [無題文]

しかし、主題の問題は助詞「ハ」だけの問題ではない。野田(2021)は、主題表示の方略として(2)に挙げられた3つの手段があることを指摘する。また尾上(1995)は「題目(語)の要件」の中に要素の位置(≡構造)にかかわる条件を挙げている。

(2) 主題表示方略(野田(2021: 80))

- a. 形態的な手段: 「は」のような主題のマーカ―
- b. 文法的な手段: 文の前の方に置くという語順
- c. 音声的な手段: 後に短い音声的休止を入れるような音調

(3) 尾上(1995: 31)の「題目(語)の要件」

①一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分と言う立場にある。

①-a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。

①-b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。

②その成分が、後続部分の説明対象になっている。(強調は引用者)

しかしながら、形態・統語・音声のどの点を取っても、主題であることの必要条件ということではできない。なぜなら、これらの表示を欠いていながらにして主題文とみなされるような文が存在するからである。主題名詞句が、提題助詞を欠く(4a)、構造的に卓越しない(4b)、主題要素が後続部と同じイントネーション句(i)にフレーズングされ、主題要素の直後にポーズが置かれ(4c)のいずれも、従来、有題文に含まれてきた。

- (4) a. 形態的表示を欠いた例
花子、大学生だよ
- b. 統語的表示を欠いた例 (cf. 三尾(1948), 佐治(1991), 三宅(2011))
田中が犯人だ (cf. 犯人は田中だ)

¹ 本発表は2024年7月6日に日本語文法学会で行われた「ポスターフォーラム」での発表(「転位陰題文の主題性の検討―顕題との比較から―」)の内容を拡大したものである。本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2114の支援を受けている。

² mizuki.sakamoto.p7@dc.tohoku.ac.jp

- c. 音韻的表示を欠いた例 (Nakagawa (2020))
(それは一大事だね)_t

以上の事情を踏まえ、本論では「主題」を一枚岩の概念として扱うのではなく、いくつかの要素が入り混じった、家族的類似によって特徴づけられる複合的概念として捉えることにする。具体的には、助詞「ハ」はなんらかの主題らしさに関わる意味1に、構造は主題らしさに関わる意味2に、音韻は主題らしさに関わる意味3に対応しており、これらの要素がすべて揃ったケースが最も典型的な主題表現と感じられる、というように考える。これを簡単に図示すると(5)のようになる。

- (5) 花子は 言語学を専攻した
- | | | | | | |
|----|--------|------------------|------------------|---|----------|
| a. | 形態的手段： | NP-ハ | ... | ⇒ | [主題的意味1] |
| b. | 統語的手段： | [主部] | [述部] | ⇒ | [主題的意味2] |
| c. | 音韻的手段： | () _t | () _t | ⇒ | [主題的意味3] |

このような多層的な主題把握を念頭に、本論では形態的手段(助詞「ハ」)と統語的手段(文構造上の卓越)の2つの主題表示方略が、どのような種類の主題的意味を担っているのか、ということを検討する。結論を先取りすると、本論は、助詞「ハ」は contrast を、構造は aboutness を表示すると結論付けることになる。

- (6) リサーチクエスション：
形態的手段(助詞「ハ」)と統語的手段(文構造)が担う主題的意味はどのようなものか

- (7) 主張
- | | |
|----|-------------------|
| a. | 「ハ」は contrast を表す |
| b. | 構造は aboutness を表す |

以下、2節では本論が分析対象とするデータの範囲を明示し、分析上の予測を立てる。3節では問題となる主題的意味の類型を導入し、これに基づいて4節と5節で各構文が示す主題的意味は何かを検証する。6節では、4節・5節の結果に基づき助詞「ハ」と構造が担う主題的意味の種類が何かを結論付ける。

2. 主題関連構文の整理

本論では、(8)に示す4種類の構文を主題関連構文として取り上げる。それぞれ、主題のハ、転位陰題文、主題性の無助詞、対比のハ、と呼ばれる構文である。

- (8) a. 田中さんは幹事だ [主題のハ]
 b. 幹事が田中さんだ [転位陰題]
 c. 田中さん、大学院生なんだよ [無助詞]
 d. 雨は降っているが、風は吹いていない [対比のハ]

これらを①助詞ハが付されているか([±ハ])、②主題要素が構造的に卓越した位置にあるか([±構造])という2つの観点から整理した上で分析を行う。

主題のハと対比のハは助詞「ハ」を伴うため[+ハ]の文である。また、主題のハは文頭に限られ、対比のハは非文頭位置のハに対応する(久野(1973: 31))。

(9) 先頭の「ハ」は主題、後続する「ハ」は対比(久野(1973: 31))

- a. 私はタバコは吸いますが、酒は飲みません
- b. 私は今週末には本は読みますが、勉強はしません (久野(1973: 31))

このことから、主題のハは[+構造]、対比のハは[-構造]であると考えことにする。

続いて、転位陰題文を検討する。従来、「AハBダ」(=(10a))と「BガAダ」(=(10b))の間にパラフレーズ関係があるように見えることがよく指摘されてきた。このパラフレーズ関係に動機づけられる形で、(10b)における「田中さん(だ)」を主題だとみなす立場が存在する(三尾(1948), 佐治(1991), 三宅(2011))。この種の主題を「転位陰題」と呼ぶ。

- (10) a. 田中さんは幹事だ
b. 幹事が田中さんだ

転位陰題は助詞「ハ」を伴わず、また文構造上特別な位置にあるとも言えない。そこで、本論では転位陰題を[-ハ]かつ[-構造]に相当するケースとして取り上げる。

最後に無助詞であるが、無助詞要素が文中に現れるか文頭に現れるかで振る舞いが異なる。文中の無助詞は脱落できる格助詞の種類に制限があり、特にガ・ヲは脱落しやすいが、それ以外は脱落しにくい。

- (11) a. ここ、つくし {Ø/が} 多いんだ
b. あいつ、車 {Ø/を} 買ったぞ
c. 山田君がきのうあの子 {*/Ø/に} 電話してたよ (丹羽(1989: 42))

他方、文頭の無助詞はこのような格助詞の種類に関する制限が見られない。

- (12) あの子 {Ø/に} きのう山田君が電話してたよ (丹羽(1989: 42))

この違いから、文中無助詞は脱落可能な格助詞(ガ・ヲ)が脱落した場合と見ることができ一方、文頭無助詞は格の種類とは無関係に名詞句を主題として提示していることを示唆する。また、文中の無助詞は既知性と関連が無いが、文頭の無助詞は既知名詞句に限られる。このことも、文頭無助詞の主題性を示唆するものである。

- (13) a. さっきから玄関のところに変な人 {Ø/が} いるよ
b. 変な人 {*/Ø/が} さっきから玄関のところにいるよ (丹羽(1989: 44))

以上の違いから、文中の無助詞は格助詞の省略である一方、文頭の無助詞名詞句は主題として文と結びついていると考えることができる(丹羽(1989), 野田(1996), 杉本(2000)など)。本論では文頭無助詞を主題性の無助詞と考え、分析の対象にする。主題性の無助詞は助詞ハを伴わないが、文構造上卓越した位置に現れるため、[-ハ]かつ[+構造]の主題関連構文だと言える。

以上の議論より、本論が扱う4つの主題関連構文は[±ハ]と[±構造]の2変数による以下のような交差分類で整理することができる。

(14) [±ハ]と[±構造]による交差分類

	[+構造的卓越]	[-構造的卓越]
[+ハ]	主題のハ	対比のハ
[-ハ]	主題性の無助詞	転位陰題

この交差分類をもとに考えると、主題のハと対比のハだけに共通してみられる特性があるならば、それは[+ハ]という性質に帰せられるべきだと言える。また、主題のハと無助詞だけに共通してみられる特性があれば、それは[+構造]の性質である。この整理にもとづけば、助詞「ハ」が担う主題的意味と、構造が担う主題的意味を峻別することができるはずである。以下では、この手続きによって助詞と構造が担う主題的意味を明らかにする。

3. 主題の種類

本論は Bianchi and Frascarelli (2010)にしたがい、主題にまつわる意味を3つのタイプに分けて考える。Bianchi and Frascarelli はイタリア語や英語の主題関連構文を論拠に主題的意味のタイプ分けを行っている。たとえば英語には2種類の異なる主題関連構文が存在する。1つは主題化 topicalization(=(15a), (16a))であり、もう1つは左方転位 left dislocation である(=(15b), (16b))。Bianchi and Frascarelli は、この2つの主題関連構文が異なる文脈に生起することを指摘しており、これを根拠にして、両構文が担う主題的意味のタイプが異なると論じている³。具体的には、主題化は主題要素「について」述べる文脈で適切となる一方(=(15))、左方転位は話題を切り替える場合に適切となる(=(16))。

(15) What can you tell me about John?

a. John Mary kissed.

b. * John, Mary kissed him. (Bianchi and Frascarelli (2010: 62))

(16) What can you tell me about John?

a. * Nothing. But Bill Mary kissed.

b. Nothing. But Bill, Mary kissed him. (ibid.)

この観察から、主題化は Aboutness Topic、左方転位は Contrastive Topic という異なる主題タイプを担う構文だとされる。

以上のような議論から、Bianchi and Frascarelli は以下3つのタイプの主題を区別する。

(17) a. Aboutness Topic (A-Topic)

b. Contrastive Topic (C-Topic)

c. Givenness Topic (G-Topic)

A-Topic は主文現象であり、文が何について述べているかを表すものである。C-Topic は対照物が存在する場合の主題であり、「A については述べるが、B については述べていない」

³ 主題化や左方転位に関する最初期の論考として Gundel(1988)が挙げられる。

というようなある種の不完全性・非網羅性をもった主題である（富岡(2010)）。G-Topic はいわゆる旧情報のことである。本論では A-Topic と C-Topic に注目して議論を進める⁴。

以下では、本論が取り上げる4つの主題関連構文が A-Topic/C-Topic として解釈されるかを検討する。その結果を、先に提示した交差分類と照らし合わせることで、助詞「ハ」と構造がそれぞれに担う主題的意味の類別を明らかにする。

4. A-Topic のテスト

本節では、4つの主題関連構文が A-Topic として解釈可能かを検討する。A-Topic 解釈が可能かを調べる第1のテストとして、「Tell me about テスト」を用いる((Erteschik-shir (2007))。これは「Xについて教えて」と問われた直後には「X」が A-Topic になることを利用したテストである。例えば、(18)は John について尋ねており、(18B)では He=John が A-Topic として解釈される。

(18) Tell me about テスト (Erteschik-shir (2007: 19))

A: Tell me about John.

B: He's very nice. (Erteschik-shir (2007: 19))

このテストを4つの主題関連構文に適用すると以下のような結果が得られる。

(19) Q: 事件 A の犯人について教えて

A1: 事件 A の犯人は田中だ [主題のハ]

A2: #田中が事件 A の犯人だ [転位陰題]

A3: 事件 A の犯人-~~は~~田中だよ [無助詞]

A4: #私は [事件 A の犯人は田中だ]と聞いた⁵ [対比のハ]

(20) Q: 田中について教えて

A1: 田中は事件 A の犯人だ [主題のハ]

A2: #事件 A の犯人が田中だ [転位陰題]

A3: 田中-~~は~~ 事件 A の犯人だよ⁶ [無助詞]

A4: #私は [田中は事件 A の犯人だ]と聞いた [対比のハ]

この結果から、主題のハと無助詞は A-Topic として適切に解釈可能であるのに対して、転位陰題と対比のハは A-topic として解釈することは難しいことが分かる。

⁴ A-Topic については Reinhart (1981), Lambrecht (1994)を、C-Topic については Büring (2003), Tomioka (2010), 富岡(2010)も参照。

⁵ 太字と下線は強勢の位置を示している。

⁶ (20A3)の容認度が低く判断される場合があるが、その容認度の低下は「田中」を繰り返すことが談話法規則に違反するからだと考えられる。次例のように代名詞などを用いれば問題なく容認される。

(i) 田中について教えて — {彼/あいつ} -~~は~~、事件 A の犯人だよ。

A-Topic 性をはかる第 2 のテストとして「従属節生起テスト」を用いる。Bianchi and Frascarelli (2010)によると A-Topic は主文現象であり、従属節には生起できない。これを踏まえて、4つの主題関連構文を従属節に埋め込んだ以下の例を見てみよう。

- (21) a. *田中は[責任者は佐藤のときなら]いつでも仕事を引き受ける [主題のハ]
 b. 田中は[佐藤が責任者のときなら]いつでも仕事を引き受ける [転位陰題]
 c. ?? 田中は[責任者-の 佐藤のときなら]いつも欠席するよ [無助詞]
 d. 田中は[責任者は佐藤だけど会計は山本のときなら]いつでも仕事を引き受ける [対比のハ]

主題のハと無助詞は従属節に埋め込むことが難しい一方、転位陰題と対比のハは容易に従属節に埋め込むことができる。この結果からも、主題のハと無助詞は A-Topic である一方、転位陰題と対比のハは A-Topic とは言い難いと結論付けることができる。

5. C-Topic のテスト

続いて、C-Topic 性を検討することにしよう。C-Topic は「Aについては知らないが、Bは～」というような、ある主の不完全性・非網羅性を持つ文脈での主題である(富岡(2010))。そこで、そのような文脈に4つの主題関連構文が生起可能かを検討することにしてみよう。

- (22) Q: 山田と佐藤は何の専門家なの?
 A: 山田は知らないけど...
 A1: 佐藤は文法の専門家だよ⁷ [主題のハ]
 A2: #文法の専門家が佐藤だよ [転位陰題]
 A3: #佐藤-の 文法の専門家だよ [無助詞]
 A4: 僕は [佐藤は文法の専門家だ]と聞いたよ [対比のハ]

この文脈では「山田については知らないが、佐藤については～」というように「山田」と「佐藤」を対比する C-Topic の環境が成り立っている。主題のハと対比のハは問題なくこの文脈と整合する。一方、転位陰題と無助詞はこの文脈で用いると文のつながりが悪くなってしまう。つまり、転位陰題と無助詞は C-Topic として解釈できないことがわかる。

6. 結論

ここまで、4つの主題関連構文が A-Topic, C-Topic としての解釈を持ち得るかをテストしてきた。その結果をまとめると下記の表の通りになる。

⁷ この例は[+ハ]かつ[+構造]の例と見ることができるので、主題のハと認定している。

(23)

	顕題「Xハ」 (ハあり/構造卓越)	対比のハ (ハあり/非卓越)	無助詞 (ハ無し/構造卓越)	転位陰題「Yダ」 (ハ無し/非卓越)
A-Topic	○	×	○	×
C-Topic	○	○	×	×

さて、ここで、4つの主題関連構文が[±ハ]と[±構造]の交差分類で整理されていたことを思い出そう。交差分類の表を下記に再掲する。

(24) [±ハ]と[±構造]による交差分類

	[+構造的卓越]	[-構造的卓越]
[+ハ]	主題のハ	対比のハ
[-ハ]	無助詞	転位陰題

この交差分類から、①主題のハと対比のハに共通する性質は助詞「ハ」に帰せられ、②主題のハと無助詞に共通する性質は構造に帰せられる、とすることができる。この予測と(23)の結果を総合すると、以下のような結論を得ることができる。

- (25) a. Aboutness は構造上の卓越に帰せられる
b. Contrast は助詞「ハ」の使用に帰せられる

これが「形態的手段（助詞「ハ」）と統語的手段（文構造）が担う主題的意味はどのようなものか」という問いに対する本論の答えである。すなわち、助詞「ハ」は contrast を、構造的卓越は aboutness を表す。

本論の結論に基づく、典型的な主題とは、助詞ハによる C-Topic 表示と、構造による A-Topic 表示が「重なった」場合だということができる⁸。

(26) 花子は 言語学を専攻した

- a. 形態的手段： NP-ハ ... ⇒ Contrastive-Topic
b. 統語的手段： [主部] [述部] ⇒ Aboutness-Topic

このような考え方では、C-Topic 性と A-Topic 性をどちらも兼ね備えた主題のハは典型的な主題表現だということができる。他方、C-Topic としての資格しか持たない対比のハ、A-Topic としての資格しか持たない主題性の無助詞は周辺の主題表現と呼ぶべきであり、C-Topic でも A-Topic でもない転位陰題文は更に周辺の主題構文と言うべきである⁹。

⁸ ただし、主題のハにおいては文が持つ「根源的排他性」と助詞「ハ」の対比性が重なることによって、表現上は助詞による対比解釈が感じられなくなる(尾上(1995))。ここで、尾上が文の持つ根源的排他性と呼ぶものは、aboutness の作用によって文の話題を神羅万象から選び出すことに由来すると考えることができるように思われる。

⁹ この議論の結果から、主題のハの文と転位陰題の文の間の「パラフレーズ関係」は、厳

最後に残る課題について触れておく。本論は Bianchi and Frascarelli (2010)の主題類型のうち A-Topic と C-Topic に注目して議論を行った。G-Topic が日本語のどのような現象とかわかるかは今後更なる検討が必要である。また、日本語の主題表示方略には助詞「ハ」と構造に加えてイントネーションも含まれる。イントネーションが担う主題の意味がどのような意味であるのか、という点についても今後の検討課題としたい。

参考文献

- 尾上圭介(1995)「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」『言語』(24)-11, 28-37.
- 佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 杉本武(2000)「無助詞格のタイプについて」『文藝言語研究 言語篇』38, 103-116.
- 富岡諭 (2010)「発話行為と対照主題」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究』301-331, 開拓社.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58 (10), 38-57.
- 丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』和泉書院
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版
- 野田尚史(2021)「日本語の文の主題と言語類型論」窪園晴夫・野田尚史・プラシヤント
パルデシ・松本曜(編)『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』74-97, 開拓社.
- 三尾砂(1948)『国語法文章論』三省堂
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- Bianchi, Valentina and Mara Frascarelli (2010) “Is Topic a Root Phenomenon?,” *Iberia* 2.1,43-88.
- Büring, Daniel (2003) “On D-trees, beans, and B-accent,” *Linguistics and Philosophy* 26, 511-545.
- Erteschik-shir, Nomi (2007) *Information Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Gundel, Jeanette K. (1988) *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Garland Publishing, New York / London.
- Lambrecht, Kund (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge University Press, Ca,bridge.
- Nakagawa, Natsuko (2020) *Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation*, Language Science Press, Berlin.
- Reinhart, Tanya (1981) “Pragmatics and linguistics,” *Philosophica* 27, 53-94.
- Tomioka, Satoshi (2010) “Contrastive Topics Operate on Speech Acts,” Malte Zimmermann and Caroline Féry (eds) *Information Structur: Theoretical, Typological, and Experimental Perspectives*, 115-138, Oxford University Press, Oxford.

密には成り立たないということが言える。両者は真理条件においては共通するかもしれないが、文が持つ主題という点ではまったく異なる文なのである。この結論は、転位陰題文を主題文に含めない見方をとる西山(2003)や丹羽(2006)に通じる立場であると言える。